

出張報告

報告日 令和3年8月12日

会派名	社会クラブ
報告者氏名	笠原晴彦 星野幸彦 秋間一英
種別	<input checked="" type="checkbox"/> 調査研究 ( <input type="checkbox"/> 行政視察 ) <input type="checkbox"/> 研修会 <input type="checkbox"/> 要請・陳情 <input type="checkbox"/> 各種会議
用務	新潟水俣病 調査研究
日時	令和3年8月5日 ~ 令和3年8月5日
場所 (会場)	新潟水俣病資料館 (県施設) ~旧昭和電工鹿瀬工場~阿賀野川周辺水域地域 (別添の行程表を参照)
調査項目等	①新潟水俣病のあらまし (発症から現在に至るまで) ②公害被害における住民訴訟の意義と課題 ③特措法及び新潟水俣病地域福祉推進条例の取組
概要	①阿賀野川流域地域住民に多数の公害被害者を出した新潟水俣病の原因である旧昭和電工鹿瀬工場について、水俣病共闘会議の■■■■氏の案内により現地確認した。また、直接の要因である、当時メチル水銀が流れ出た阿賀野川につながる排水口についても現地視察した。 ②新潟水俣病患者会・第2次訴訟原告団団長の皆川氏を訪ね、水俣病が発症した当時の阿賀野川水域周辺地域の生活や住民の被害状況、現在に至るまで続いている裁判訴訟について説明を受け、課題共有した。 ③第一次訴訟、第二次訴訟から水俣病特措法の施行に至るまでの、公害被害からの住民救済のための取組について。 ④新潟水俣病資料館及び新潟水俣病地域福祉推進条例 (新潟県福祉保健部所管) について。
所感等	阿賀野川は信濃川に次ぐ県内の大きな川となっていて水深は深いところで10mにもなり川幅は広いところで200~300mある、当然山間地の集落では阿賀野川で取れる魚類は貴重なたんぱく源であり重要な生活の糧となる収入源として地域の人たちは阿賀野川と共に生き歴史を作ってきたと考えられる、それまでは、恥ずかしながら新潟水俣病についてはこれまで詳しい内容は調べることはしなかった。今回の視察はいろいろな面で勉強になった。案内をしていただいた■■■■氏の「大きい魚を取るためには小さな魚の犠牲はしょうがない」と言われた言葉が忘れられない。 鹿瀬工場の最盛期は昭和23 (1948) 年ころで社員・下請け合わせて2,500人おり人口も1万人を超えていた。昭和36 (1961) 年の町税込金額7,500万円のうち昭和電工は2,000万円負担していた、町議会議員も22議席中昭和電工関係者が9人もいた。(高濃度水銀が発見された昭和40 (1965) 年から20年後 (1985年) に従業員は190人ほどに激減となった。) 町議会も水俣病発症原因は昭和電工にないと検診の中止を決めたり今では考えられないことが行われていた、同じ轍を踏まないためにも原子力発電には先を考えた対応が必要と考えさせられた。